

変化に晒されるマレーシアとそのエネルギー課題

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

9 月 2 日および 3 日、マレーシアにおいて現地の政府関係者、大学・研究機関関係者、エネルギー産業関係者と、世界及びマレーシアのエネルギー情勢と政策課題に関する意見交換を行う機会を得た。豊富なエネルギー資源を有し、石油とガス、とりわけ LNG の主要な輸出国であるマレーシアにおいて、エネルギー面においてどのような課題・問題が存在しているのか、同国を取り巻く内外課題のどこに主要な関心があるのか、を理解する上で興味深い機会となった。

第 1 に、主要な輸出国だからこそではあるが、現在の国際エネルギー市場で起きている激変への関心が非常に高い、ということ挙げたい。先週は WTI が 40 ドルを切り、今週は反発してブレントは 50 ドル台に戻すなどの激しい相場展開になっている原油価格問題については、その先行きをどう見るのか、需給要因、地政学要因、金融要因、そして OPEC 要因などについて高い関心が示された。

現在の状況を踏まえると、少なくとも本年中、そして短期的には需給環境は弱含みで低価格環境が続く可能性が高いこと、場合によるとまた一段の下げの可能性もあること、等の見方がある中、原油価格の行方は同国関係者にとって看過できない課題となっている。もちろん、マレーシアの輸出構造では電子機器等が最大の輸出品目ではあるものの、石油・LNG 輸出の重みは決して軽くなく、折しもナジブ首相の不正献金疑惑問題で国内体制が揺れ、経済面でも不確実性が高まる中で、原油価格の低下はマレーシア経済にとって重荷となっていることは確かであろう。

また、マレーシアにとっては極めて重要な輸出品目となっている LNG についても、スポット価格低下に見られる需給緩和、原油価格連動方式を採用する長期契約 LNG 価格の下落、など現況は厳しい状況にある。アジアの LNG 需給バランスをどう見るか、今後の価格方式のあるべき方向性などについて、高い関心と真剣な問題意識が存在することを実感した。

そして、上記の 2 点、原油価格低下と LNG 需給問題に対して共に大きな影響を揮っている「シェール革命」について、マレーシアにおける知見と分析の蓄積が十分でなく、今後国内でそれにどう対応・強化すべきなのか、という点についての強い問題認識を感じ取ることができた。シェール革命の行方と影響をどう読むか、はマレーシアにとっても喫緊の重要課題となっているのであろう。

また、筆者にとって、意見交換の中で、エネルギー安全保障問題とエネルギー地政学問題の重要性について、度々マレーシア側関係者から言及がなされた点も大いに興味深かった。日本のようなエネルギー純輸入国ならばともかく、エネルギー純輸出国であるマレーシアが、エネルギー安全保障問題や中東情勢・ロシア／ウクライナ情勢とエネルギー地政学問題に高いレベルの関心を寄せているということ自体がある意味では意外でもあった。この分野における分析・研究のレベルを上げていくことが必要という意識をひしひしと感じたのである。

しかし、考えてみると、今日の国際エネルギー情勢は様々な要素が密接不可分に、そして複雑に絡み合っている。その中エネルギー純輸出国も、世界全体の中であるいは貿易相手国である輸入国にとって、エネルギー安全保障問題やエネルギー地政学問題がどう捉えられているのか、を正確に知ることは有意義であることは間違いない。それに加えて、今回の意見交換で感じたことは、マレーシアも徐々に自国の需給環境が変化しつつあり、長期的にはエネルギー輸入の拡大と純輸出国としての立場に変化が起るかもしれない、ということを意識し始めているようである。例えば、アジアの主要 LNG 輸出国であるマレーシアは、最近新たな基地を建設し、LNG 輸入を開始した。今後も LNG 輸入は拡大する見通しで、全体のバランスとしては純輸出国であり続けるが、輸入国の顔・側面が徐々に拡大する方向にもある。需給バランスの変化は、問題意識の変化をもたらすものであり、中国が 1993 年に石油純輸入国化した後、急速にエネルギー安全保障対策を強化して行った例もある。

もう一つ、今回の意見交換で興味深かったのは、マレーシアにおける電力部門の課題である。かつて、石油依存度が高かったマレーシアの電力部門では、分散化のための「4 燃料政策」が展開され、ガス火力の割合が急速に拡大したが、近年は代わって石炭火力が拡大、最大の発電ソースとなっている。今後予想される電力需要の拡大に対して、環境負荷・安全保障・経済性等のバランスを取りながらどのような電源を選択して行くのか、が一つの大きな課題となっている。原子力発電の導入を長期的な目標と置きつつ、再生可能エネルギー導入もコスト負担や系統対策等を考慮しながらどこまで拡大できるか、模索・実験が行われている感がある。

これらの問題意識から、日本で行われつつあるエネルギー政策の議論、中でもベストミックス論やベストミックス実現のための政策及び国民との対話といった問題に並々ならぬ関心があることを感じた。「失敗」も含め日本から学ぶことのできるものは何か、という意欲に触れたともいえる。マレーシアは、現在は国内政治問題で揺れ動く面もあるが、政治・経済・エネルギー面で、アジアにおいて、そして ASEAN において極めて重要な位置付けをもち将来的成長ポテンシャルも高い国である。わが国として、どのような協力をさらに深化・強化させていくべきなのか、改めて戦略的に熟考して行く必要がある、と実感することになった。

以上